

。 AN ADVANCED ENGLISH SYNTAX

NOSOF

篠崎書林発行

。 THE SUMMING UP

W. S. Maugham

a Penguin Book 発行

(文責 豊島洋子)

横光利一の文体について

水 野 真

序 横光利一は新感覚派から心理主義へと移行している。そこで、新感覚派の作品と心理主義小説を比較検討してみる事により、横光利一の文体が、この間にいかなる相異を示し出したのか、つまり、手法の変化を明らかにしていこうとするのが、この論文の目ざすところである。作品として、新感覚派時代の代表作の「日輪」と心理主義小説の代表として「機械」を更に、作品における時間的な変遷をも探るために、「日輪」につぐ新感覚派の作品である「静かなる羅列」と「上海」「機械」と同系統の「時間」、後期の作である「寝園」「紋章」と計七編を取り上げ、変化の著しいであろうと予測される文の長さ、品詞の用法、文の構成の3つに分けて調べてみることにした。

本論 (I) 文の長さ

- (a) 方法—ここでは「日輪」「静かなる羅列」「上海」「機械」「時間」「寝園」「紋章」の七つの作品を対象として調べていく。(1)各作品の会話体を除く四百句からなる地の文を取り出す、(2)取り出した文章における点間字数、文を構成する字数及び句数を調べる、(3)次に平均字数、文長中数、文長指数、標準偏差、変化係数を求める。
- (b) 文長—統計的な数値でそれらがわかりやすい表とグラフで示されている。
- (c) 句長—文の構成単位である句の長さは、文長といかなる関係を持っているであろうか、ということをおべている。

(II) 品 詞

ここでは「日輪」「静かなる羅列」「上海①」「上海②」「機械」「時間」「紋章」の七編と、比較資料として川端康成の「千羽鶴」谷崎潤一郎の「細雪」の計九編を対象にしている。そして

皇頭から千字抜き出し、名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞の数をしらべている。

Ⅳ 構文

最後に文章構成の上での特徴を具体的に調べるために「日輪」と「機械」の二編でおこなっている。(a)文型、(b)比喩、(c)その他

結論

これから、新感覚派から心理主義への移行によって起った文体の相異をまとめてみるならば、新感覚派の作品の文体は、まず文章が短く、簡潔であり、文章としては、張体である。「日輪」においては、形容詞、副詞にかえて、比喩の使用、擬人法、韻文的リズムにより、瞑想の世界、革やかな世界をくりひろげたのである。心理主義に入ると、美文としての手法は全く用いられず、ただひたすらに時間的叙述に専念し、その結果、文は長くなり、接続詞の頻用という手段を取るまでになった。これをしつの手がかりとしてこれからもっと詳しく調べていきたいと思っている。

参考資料

- ・ 横光利一集(32)現代日本文学体系
- ・ 横光利一 (29)日本文学全集
- ・ 横光利一集(36)現代日本文学全集
- ・ 横光利一 (37)日本の文学
- ・ 横光利一と新感覚派(日本の近代文学)

伊 藤 整

- ・ 様々なる意匠 小林 秀 雄
- ・ 文章心理学 波 多 野 完 治
- ・ 文章心理学の理論 波 多 野 完 治
- ・ コトバの科学 (5) コトバの美学(中 村 明)
- ・ 横光利一 近代作家叢書 保 昌 正 夫
- ・ ことば 文章 芳賀 純一 安 本 美 典
- ・ 谷崎潤一郎(11)現代日本文学館
- ・ 川端康成(38)日本文学

(文責 増田)